

研究ノート

長崎国際大学におけるピア・サポート活動の現状と課題

細野 広美¹⁾, 柳 智盛¹⁾, 小島 大輔²⁾
藤原 俊幸³⁾

(¹⁾社会福祉学科、²⁾国際観光学科、³⁾薬学科)

Current Situation and Issues regarding Peer Support at Nagasaki International University

Hiromi HOSONO¹⁾, Jeessoung RYU¹⁾,
Daisuke KOJIMA²⁾ and Toshiyuki FUJIWARA³⁾

¹⁾Department of Social Work, Faculty of Human and Social Studies,

²⁾Department of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,

³⁾Department of Pharmacy, Faculty of Pharmaceutical Sciences)

Abstract

Recently, peer support has been introduced to approximately half of the universities in the country. At Nagasaki International University, building on several peer support activities at each faculty and department, an all-campus system of peer support was established in academic year 2017. This paper provides a summary of the current situation and issues with regard to the all-campus peer support system, as well as peer support activities uniquely developed by each faculty and department. In addition, based on results from an interview survey with students engaged in peer support, the paper reexamines the effects of peer support activates to students and the university as a whole, while presenting a model for a future system of peer support coordination.

Key words

peer support, university student, learning commons, coordination system

要 旨

近年、全国の約半数の大学において、ピア・サポートが実践されている。長崎国際大学においては、各学部学科で展開してきた複数のピア・サポート活動をベースに、2017年度より全学的なピア・サポートの組織を体系するに至った。本研究では、まず、現在の全学組織としてのピア・サポートとこれまで各学部学科独自に展開してきたピア・サポートの現状と課題を整理する。加えて、ピア・サポートに関わる学生へのヒアリング調査の結果から、ピア・サポート活動の学生・大学全体への効果について再考し、今後のピア・サポートの運営体制のモデルを示す。

キーワード

ピア・サポート、大学生、ラーニングコモンズ、運営体制

I. 問題と目的

ピア(Peer)は「仲間」を、サポート(Support)は「支援」を意味する。西村(2014)は、ピア・サポートとは、仲間や同僚による相互的な社会

支援のことであり、学校教育の文脈で用いられる場合には、子ども同士で教え合い、助け合うような関係をもつようになることを指すと述べている。ピア・サポートの対象や内容、実施の

形態は活動によって異なるが、ピア・サポートとは、その活動を実施するコミュニティのニーズや特性が反映された具体的な目的に沿って、さまざまな活動をしながらか自己と他者の違いを学び、他者を支援するスキルを身につけていくものである(橋本, 2012)。

日本におけるピア・サポート活動は、小中学校への導入に始まり、現在では大学をはじめとする高等教育機関においても、広島大学での取り組み(内野, 2003)を契機に導入・実践がなされるようになった。大学におけるピア・サポートの実態として、日本学生支援機構が平成27年度に行った「大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査」によると、日本の大学におけるピア・サポートの実施状況は、全体で49.3%であり、国立大学で83.5%、私立大学で46.4%、公立大学で34.9%との結果であった。過去の調査¹⁾と比較すると、実施率は徐々に高くなってきており(大学全体:平成25年度調査43.6%、平成22年度調査35.6%)、全大学の半数に迫るまでの広がりを見せるなど、未だに発展を続けている取り組みといえる。同調査によると、ピア・サポートの実施領域としては、「学習サポート(42.1%)」「仲間づくり(29.1%)」「修学相談(26.5%)」の順に高く、その他「留学生支援(24.0%)」「生活上の支援(20.3%)」「障害学生支援(16.7%)」「就職アドバイス(12.9%)」「学生寮支援(8.2%)」などが挙げられており、その内容も多岐にわたっていることがわかる。

長崎国際大学(以下、「本学」)におけるピア・サポートは、開学間もない時期に、身体障害を持つ学生の入学を機に、対象学生の所属学科内において、教員と学生が無償のボランティアとして始めた取り組みからスタートした²⁾。その後も、入学する学生の状況に応じて、各学部学科での取り組みの一環として、学生が学生を支援する実質的にピア・サポートといえる活動が取り入れられてきた経緯がある。そのような各学部学科での取り組み(体制)をベースとして、

2017年度より、キャンパスライフ・ヘルスサポートセンター(以下、CHサポートセンター)が学生生活サポート室内に、ピア・サポート担当教員・学生を有する全学的な組織を体系し、配慮を必要とする学生(以下、配慮学生)への合理的配慮のひとつとして、ピア・サポートを提供できるようになった。2017年12月現在、CHサポートセンターに、ピア・サポーターとして登録している学生数は64名である。さらに、2017年4月より、学生の学修支援を行うとともに、教育の向上に向けた企画・立案を行い、本学の教育の発展を担うための教育基盤センターが設立された。教育基盤センター内には、学生1人ひとりに応じた学修相談及び学習支援を担う学修支援部門が組織され、ラーニングcommons³⁾において、上級生が下級生の学修・修学上の相談を受ける仕組みが整備された。その他にも、本学内には現在、学生が学生同士で支援し合う仕組みとして、社会福祉学科のSA(Student Assistant: スチューデント・アシスタント)制度や薬学科のLA(Learning Assistant: ラーニング・アシスタント)制度といった学部学科独自の複数の制度がある。表1に、その一部を示す。なお、ピア・サポートは、本来学生同士が双方に教え合う、助け合う関係を前提としているため、サポートを受ける側と提供する側を区別していくことが難しい場合や、サポートを受ける学生と提供する学生の役割が随時入れ替わるような場合も想定されるが、検討の便宜上、本研究においては、ピア・サポートを受ける学生を利用学生、ピア・サポートを提供する学生をサポーター学生と表記することとした。

表1に示した取り組みは、いずれも学生同士でサポートし合うものであり、実質的にはピア・サポート活動だが、名称や対象学生、実施体制は活動により様々である。学内に複数のピア・サポート活動が存在することは、利用学生や学生を紹介する教職員にとって、選択肢が増える意味ではメリットがあるが、どの窓口にいけばどのようなサポートが得られるのか、それぞれ

表 1. 長崎国際大学におけるピア・サポート活動の名称と対象

名称 対象		教育基盤センター ラーニングコモンズ	CHサポートセンター ピア・サポート	社会福祉学科 SA制度
利用学生	初年次学生	○		○
	留学生	○		○
	配慮学生		○	○
サポーター 学生	募集方法	各学科等より3～4名、 2年生以上の学生が登録 (留学生含む ／各学科等より推薦)	全学科全学年の学生のうち、 登録を希望した者	学科内2年生以上の学生 (本人の希望→ ゼミ教員より推薦)
	給与	○	○	○

の活動の位置づけや提供しているサポート内容等を理解していないことによる混乱を招く可能性もある。

そこで、各センター・学部学科で蓄積したピア・サポート活動の知識・経験を集約し、本学全体のピア・サポート活動に活かすため、まずは本学のピア・サポートの現状と課題を整理する必要があると考えた。現状と課題の整理にあたり、まずは、長崎国際大学平成27年度学長裁量経費「大学における学生支援のための体制構築及び支援プログラム」(研究代表者：柳智盛)の一環で実施したヒアリング調査のデータを再考することとした。ヒアリング調査行った2015(平成27)年度当初は、現在のような全学的な組織としてのピア・サポート制度はなく、各学部学科が配慮学生の状況に合わせ、独自にピア・サポートを展開していた背景がある。本ヒアリング調査のデータは、2015年度時点で配慮学生へのピア・サポートを行っていた国際観光学科と社会福祉学科のピア・サポートを対象としたものであり、本学の現行のCHサポートセンターでのピア・サポートはこれらの活動をベースとしている。なお、国際観光学科にて行っていた配慮学生へのピア・サポートについては、CHサポートセンターがその体制を引継ぎ、社会福祉学科では従来の社会福祉学科独自の制度としてのSA制度を2017年度現在まで継続している。そこで、本研究においては、全学的組織である、①教育基盤センターにおけるピア・サポート活

動、②CHサポートセンターにおけるピア・サポート活動に加え、2017年度現在も継続している学部学科独自の仕組みの1つとして③社会福祉学科で行っているSA制度の3つを取り上げる。2017年度現在の実施体制やサポート内容、実施状況については、各制度の利用状況や関連する規定、委員会や学科会議等の資料を参考に整理することとした。

以上を踏まえ、本研究の目的は、本学で行ってきたピア・サポート活動を、ヒアリング調査の結果と3つのピア・サポート活動の実態(実施形態、サポートの提供内容、実施状況)について比較・検討することを通して、本学におけるピア・サポート活動の現状と課題を把握し、今後のピア・サポートの運営体制のモデルを示すことである。

II. 本学におけるピア・サポート活動の状況

1. 2015年度にピア・サポート活動に関わった学生・教職員に実施したヒアリング調査

本項では、長崎国際大学平成27年度学長裁量経費「大学における学生支援のための体制構築及び支援プログラム」(研究代表者：柳智盛)の一環で実施したヒアリング調査のデータをもとに、本学における配慮学生に対するピア・サポートの効果と課題について検討する。

1) ヒアリング調査の目的

ピア・サポート活動の現状を把握し、全学的

なピア・サポート活動の体制作りに向けて収集した情報を分析する。

2) ヒアリング調査の対象

ピア・サポート利用学生3名(国際観光学科1名、社会福祉学科2名)、利用学生の保護者1名(国際観光学科)、サポーター学生6名(国際観光学科2名、社会福祉学科1名、大学院生3名)、ピア・サポートの運営に関わっている教員3名(国際観光学科)の計13名。

3) ヒアリング調査の方法

ヒアリング調査の時期は2015(平成27)年9月に、調査対象者1名に対し、調査者2～3名による面談で行った。面談内容をICレコーダーで記録をとり、その後、それを基に文章での記録をした。なお、ヒアリング時間は1人当たり33分～100分間であった。

4) ヒアリング調査の内容

ヒアリング調査の主な質問内容は以下の通りである。以下の項目に沿って、対象者に質問し、対象者の回答を具体的に聞き取っていった。

①ピア・サポートを受けている学生・保護者

- ・自身が受けたピア・サポート活動の内容
- ・ピア・サポート活動が役立ったこと
- ・全学的なピア・サポート活動についての参考意見

②ピア・サポートを提供する(サポーター)学生

- ・ピア・サポート活動に参加したきっかけ
- ・ピア・サポート活動に向けた「事前オリエンテーション」の必要性
- ・ピア・サポーターとして活動して感じたこと
- ・ピア・サポート活動の運営を通して感じたこと

③ピア・サポート活動担当教員

- ・ピア・サポート活動の運営(募集、活動内容、活動期間、人数)

- ・ピア・サポーターから受けた相談
- ・ピア・サポートを受けている学生から受けた相談
- ・ピア・サポート活動の運営を通して感じたこと

5) 倫理的配慮

ヒアリング調査開始前に、対象者に対しインタビューの趣旨に関する説明ならびにヒアリングへの協力を依頼し、調査への協力可否について同意書による同意を求めた。また、ヒアリング内容をICレコーダーにて録音し、公表する場合には個人が特定できないよう処理する旨了承をとった。なお、本ヒアリング調査の内容については、長崎国際大学人間社会学部国際観光学科の研究倫理委員会において承認を得ている。

6) ヒアリング調査の結果

ヒアリング調査で聞き取った内容について、利用学生、利用学生の保護者、サポーター学生、活動にかかわった教職員それぞれの具体的発言をヒアリングの対象ごとにカテゴリー分けした。利用学生からのヒアリング内容については、ピア・サポートの具体的内容について言及した「サポート内容」、サポーター学生の配置(シフト)やサポーター学生との要望のやりとりなどの「運営・実施体制」、ピア・サポートを受けて実感している「効果」、今後のピア・サポート活動への「要望」、ピア・サポート「活動をして感じたこと」の5つのカテゴリーに、利用学生の保護者へのヒアリング内容については、「サポート内容」「運営・実施体制」に加え、保護者から見た「利用学生の変化」の3つのカテゴリーに分類した(表2)。また、サポーター学生へのヒアリング内容については、ピア・サポートに「参加したきっかけ」、提供しているピア・サポートの具体的内容について言及した「サポート内容」、ピア・サポート開始前・開始時の「オリエンテーション」に関するもの、サポーター学生間の配置(シフト)についての連

絡・調整や引継ぎに関することなどの「運営・実施体制」、ピア・サポートに参加しての感想や自身の変化などの「活動して感じたこと」の5つのカテゴリーに、教職員へのヒアリング内容については、ピア・サポートのサポーター学生を集めるための「募集・オリエンテーション」に加え、「サポートの内容」「運営・実施体制」「学生からの相談」「今後の活動の課題」の5つのカテゴリーに分類した(表3)。カテゴリー毎の具体的な発言内容は表2、表3に示す。

利用学生へのヒアリングの結果、ピア・サポートが提供されることにより、茶道、パソコンなどの実技・実習関係の科目や、テスト勉強対策など具体的なサポートによる効果の実感に加え、「外に出るのはかなり増えた」、「先輩と勉強以外の話もでき、仲良くなった」、「(大学生活は)充実している。普通の人より、かなりいいかなと思います」などの、大学生活全般の充実、利用学生とサポーター学生との友人関係への発展などがみられた。また、利用学生の保護者へのヒアリング結果から、「大学入学後積極的になった」、「前向きな発言が見られるようになった」といった、利用学生の生活面・心理面の客観的な変化も見られた。

次に、サポーター学生へのヒアリング調査の結果をみると、活動動機としては「何か活動をしたい」という何気ない気持ちがあげられていた。しかしながら、ピア・サポート活動を通して、「自分達が利用学生へのサポートをすることで、学べるが多かった。サポートの仕方、不自由な方への接し方」、「色々な考えや自分を発見できるようになった」とサポーター学生にとっても有意義な活動となっていることがわかった。

また、ピア・サポートの運営・実施体制についても、「サポーター学生との調整を自分でSNSで行えたので、柔軟に対応できた(利用学生)」、「みんなができる範囲で上手に調整している(サポーター学生)」、「長年サポーターとしてかかわった学生が中心で対応してきた(サポーター

学生)」、「少しずつサポーター同士で、情報交換をした(サポーター学生)」と、学生が友人関係や先輩後輩関係の中で、主体的に調整や引継ぎを行う形で運営に関わっていたことがわかった。そのような体制だからこそ、「利用学生と仲良くなった(サポーター学生)」、「お互いにサポートし合っていた(利用学生)」というように、学生間にサポートを提供する・される関係以上の効果が醸成されていたのではないだろうか。ただし、このような運営・実施体制の背景には、「担当は、利用学生とサポーター学生の関係及び、サポーター学生同士の関係性を考慮して調整した(教員)」、「振り返りは毎年、ピア・サポーターを招集して先生も一緒に行った(サポーター学生)」といった、学生たちが安心してピア・サポート活動に関与するための教員らのサポートがあってこそのものであると考えられた。

さらに、「障害はあるけど、何もできないのではなくて、一面的なもので、できることもあるということを見てもらえたらいい(利用学生)」、「(障害のある学生と接することについて)最初は、不安や壁があると思い込んでいたけど、後からはなかったと思える(サポーター学生)」というように、ピア・サポートを通して活動を共にしていく中で、学生双方の“障害”や学生間の関係性についての認識や捉え方の変化といった効果も期待できることがわかった。また、「留学生に言葉を教えるなど、お互いにサポートし合っていた(利用学生)」、「サポートはしっかりするけど、感覚としては友達として、一緒に講義を受けるといいと思う(サポーター学生)」など、ピア・サポート活動がさらに発展・展開していくことで、利用学生・サポーター学生の双方が、支え合い・助け合いながら、共に大学生活を過ごすことができるような、大学の風土の形成に寄与する可能性が示唆された。これは、本学のディプロマポリシーに位置付けられているホスピタリティの醸成⁴⁾につながるものと考ええる。

表 2. ヒアリング調査の結果 (利用学生・保護者)

対象	カテゴリ名	ヒアリングの具体的発言内容 (※一部抜粋・意味を損なわない程度に表記・文言を修正)
利用学生	サポート内容	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の代筆、食事介助、教室間移動、空き時間の自習の手伝い。 ・オリエンテーション時にサポートしてもらった。 ・茶道の時間やパソコンの授業でのサポートを受けた。 ・茶道の時は、横についてもらって、細かな説明をしてもらいました。釜や茶碗も見えないので、細かく教えてもらいました。手順は、自分で覚えています。 ・パソコンは、私の画面で、今こういうのしていると教えてもらっていました。画面をクリックするところは、サポートの人が教えてくれる。 ・教科書・プリントのデータ化。 ・授業が始まる前に、拡大鏡を入れてもらっていた。 ・紙を大きくして横に置いて、横についてもらった人に読んでもらっていました。 ・勉強を教えてもらった。その週にした内容を振り返るのと、そこの範囲の教科書を読んでいくことをしていました。わからない言葉があったらすぐに聞いて、教えてもらっていました。 ・勉強だけでなく履修登録を教えてもらった。 ・テスト勉強対策法。 ・大学にいる時は、基本的に誰かが一緒にいる。 ・部活動の練習に参加させてもらい、トレーニングを手伝ってもらった。 ・授業以外の時(部活動、サークル等)は、誰とは決まっていなくて、全員がやる感じ。
	運営・実施体制	<ul style="list-style-type: none"> ・サポーターがいけない時間がないように、自分で調整お願いしている。 ・予定変更はピアサポーターにお願いしてキャンセルしている。 ・ピアサポーター学生との調整を自分で SNS で行えたので、柔軟に対応できた。 ・原則 1 人 1 科目だったが、サポーター学生との時間調整がきけば複数科目を教えてもらった。 ・ピア・サポーターに「もっとこれをしてほしい」と伝えられる環境である。
	効果	<ul style="list-style-type: none"> ・サポートを受けて、役立っていると思います。 ・(学習支援) 1 対 1 で教えてもらった方がわかりやすい。 ・テスト勉強対策法を教えたりとか。ありがたい。 ・SA の先輩と勉強以外の話しもできた。仲良くなった。 ・高校生の時は、先生に任せていた。大学に入学の時は、「学生で大丈夫かな」と思っていたけど、みんな頼めばしてくれる。 ・外に出るのは、かなり増えた。 ・(大学生活は) 充実していると思います。普通の人より、かなりいいかなと思います。 ・視覚的にわからないところとか、茶道、パソコンは一番大変なところだったから全然ついていけなかったの、こういう制度があって良かったです。 ・ここまでサポートしてくれるとは思っていなかった。大学って全て自分でしないといけないと思っていた。
	要望	<ul style="list-style-type: none"> ・(学習支援の際) 口頭だけでなく文字に書いて教えてほしい。 ・大きい教室での学習支援は集中できない時があった。 ・全学共通科目や学部共通科目にもサポートを広げてほしい。 ・(学習支援の対象は基本的に 1, 2 年生だが) 4 年生までやってほしい。 ・授業中、ピアサポーターに指示するのは、私語になる。自分の声でさえきるので、どうしたらいいか。授業中にメモをとりたいことはある。感度の低い人は「今のとこって、どこ？」や、後で言おうとしても、自分が覚えていない。 ・授業と授業の間に、ピアサポーターがデータ関連の手伝いをしてもらえるといいです。 ・後輩のサポーター学生が入ってきて、緊張ってやっている感じがする。ピア・サポートはのんびりやってほしい。
	活動して感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・一時期、留学生に言葉を教えるなど、お互いにサポートし合っていた。 ・「障害について」話したりするので、障害者を身近なものとして理解してくれるといい。障害者は、助けないとけないと、立場的に弱い存在と思いが先にある。容易に頼むことができないと、かなり感じます。 ・障害はあるけど、何もできないのではなくて、一面的なもので、できることもあるということを、見てもらえたらいい。
保護者	サポート内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学校にいる時は、授業・空き時間・食事に、サポートがついています。安心してお任せしています。ピアサポーターがいけない時はない。 ・排泄介助で、学生との話はあったけど、入ったことはあるけど、抵抗はあるようです。
	運営・実施体制	<ul style="list-style-type: none"> ・大学入学すぐに体制が整って良かった。 ・最初、サポートとして入る学生という感じだけど、今は友達という感覚なので、嬉しいです。中学と高校の時は、なかなかうまく付き合う人はいなかった。 ・「お金はいらんとけどね。」と言っている友達もいるみたいですが、きちっとしたシステムを先生がしてくれているから。 ・(サポーター学生との) 喧嘩は、たまにあるみたいです。だからといってなんてことはない。きちっと、サポートに入ってくれている。
	利用学生の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・普通に学生生活を楽しんでいる。 ・学外でも友人と活動することによって、1 人で電車通学をしてみたいと言うようになった。 ・障害があるけれども、(母親が)「そこまでしたい？」と思うくらい大学入学後積極的になった。 ・前向きにやりたいことに取り組んでいる。 ・(母親に)「1 人暮らしをしたい」と言う。 ・今まではサポーターや母親がついていない時は、教科書などがめくれないので自分で学習する時間がなかったが、教科書をデータ化することでサポーターがいなくても自分で勉強できる環境にある。

表3. ヒアリング調査の結果（サポーター学生・教員）(1)

対象	カテゴリー名	ヒアリングの具体的発言内容（※一部抜粋・意味を損なわない程度に表記・文言を修正）
サポーター学生	参加したきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> 最初は、サークルの活動に参加のような感覚でした。ちょっとした思いで、ボランティアをやりたいということではない。何か活動をやってみようかなと思った。 オリエンテーションの時、担当の先生の説明を聞いて知り、やってみようと思った。
	サポート内容	<ul style="list-style-type: none"> 朝時間があれば、車からの移乗、講義のサポート、プリント書き、ノート書き、昼休みサポート、空き時間一緒に過ごし、話し相手をしします。 ノートテイクでは、基本的にノートをとる場合は板書を書く。利用学生から「ノートとっておいて」「ライン引いておいて」と指示があるのでそのようにする。 サポーター学生が同じ授業を受けながらのサポートでは、プリントは焦って書く。2名体制なので、もう1名がフォローする。 食事介助は2人体制である。1人ですることもある。1人ですると食べる時間が無くなることも時々ある。 利用学生が、「次、何々」と、言ってくれる。 （部活やサークルでは）サークルやクラブのメンバーで、サポートをしています。 紙の資料がある時は、拡大してあげるのと、普通のを置いてあげて、だいたい席が決まっていたんで、資料の準備です。事前の配慮はした。模擬試験、性格診断が8枚くらい送ってきたんですけど、結局大きくしたみたいですけど、結果を見てしまうことになるので、それは、どうなんだろうと思うことはあった。本人には、特別配慮したことはなかった。 サポート内容によっては、学生のピアサポーターではなく、教員が行うサポートもある。
	オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> 高校生の時に地域のボランティアに参加したことはあるが、ピア・サポーターの経験はない。 特別連絡は受けていなくて、配慮が必要だということには聞いている程度でした。 最初に、入って来た学生には、オリエンテーションは、あった方がいいと思います。どこまで、自分たちが補助をした方がいいのか。 （利用学生についての情報は）利用学生に直接聞いた方が、もっと色々、内のことを話していけるのかなと思う。でも、ある程度のことば、教えていた方がいいと思います。仲良くなれば、さらに色々話せていけると思う。 ピア・サポート制度が始まったときは、詳しく事前オリエンテーションがなかったので、先生や利用学生本人から聞いてサポートしていた。今はピア・サポーター同士で、先輩が後輩に教えている。 新しくサポーターが入った場合、サポーター自身がどのような補助をしたら良いのか、介助器具の取り扱いなどの注意を促す必要がある。 利用学生の具体的な性格などを、付き合いが長い先輩サポーターから後輩に教えてあげると良いと思う。ピアサポーターは、利用学生と話さないと壁ができてしまう。利用学生も障害の内容を聞かれると思っているし、話してくれと思う。
	運営・実施体制	<ul style="list-style-type: none"> 友達としてやっていただけ、他の学生は、お金が発生するので、ピアサポーターとしての認識としては高い。そこから外れると遊び感覚になってしまいます。ピアサポーターが終わった後も、ピアサポーターの時間も、ある程度友達として接した方が利用学生もやりやすいと思う。サポートはしっかりするけど、感覚としては友達として、一緒に講義を受けるというと思う。 ピア・サポーターの他学科の学生が少ないと感じる。学科が違うと受ける授業が違うので難しいとは思いますが、他の学科にも強く呼びかけたらいいと思う。 今の利用学生が受けている勉強は他学科の学生がサポータになっても大丈夫だと思う。 留学生のピアサポーターもいた。 先輩がサポーターにつくときは敬語になるが、問題は抱えてないと思う。 色々な学年のサポーターがいるが、サポーター同士で縦の関係になることはない。みんなが協力しているからできている。先輩・後輩でやりづらくことはない。 振り返りは毎年、ピア・サポーターを招集して先生も一緒に行った。情報の共有もした。 利用学生から「困っているんだよね」と相談や愚痴はあった。そういう時は臨機応変に対応した。長年サポーターとしてかかわった学生が中心で対応してきた。 サークルみたいに、まとめ役をつくと、まとめ役の負担が大きくなる。今は、先生がいるので、みんなが同等であった方がいいと思う。 今のピア・サポート活動は、みんなができる範囲で上手に調整をしている。 時々、混乱することはシフトです。シフトが最初に決められているけど、それぞれ用事や体調が悪くて来れなくなった時の入れ替えの時です。月に1回、「〇〇〇〇に入りました。」と紙（勤務表）を出している。後で提出するものなので、書き忘れがあったりする。誰が変わったのですかという状態になる。 誰と誰が変わったと後で見れるように、SNSに載せるようになっている。 サポートに誰も入れないこともあった。特にテスト前は、サポートできないことがあった。その時は先生たちが入っていた。 ピア・サポートや学外活動の引継ぎは、サポーターや部活内で引き継ぐ。 授業時間外のサポートはボランティアで行っている。関わる時間は長い。サポートするのは最初は母親が多かったけど、サポートする人たちが広がった。 コースが変わり講義が合わなくなってきたため、サポートに入る回数が少なくなった。 同学年のサポーターが就職活動や実習などで大学にいないことが増えた。
	活動して感じたこと	<ul style="list-style-type: none"> サポートをするようになって、利用学生と仲良くなった。 長年のピア・サポーターである数名と利用学生は深く仲がいいと思う。カラオケなど遊びに行くこともある。 最初の頃、講義など一緒だったので自分との関わりが多かった。もう少し、利用学生も色々な人とかかわった方が良かったのかなと思う。 利用学生は話す友達はいるけど、一緒に遊びに行く友達は少ない。遊びに行くとなったら両親も一緒になるので、誘いづらかった面は仕方ないと思う。 不安なことはあった。最初の頃、入った学生と、「あそこは、どんな風にサポートすればいい」と、相談していた。少しずつサポーター同士で、情報交換をした。また、先生や利用学生に聞いて、サポートしていた。 最初に困った内容は、会話する内容です。どこまで聞いていいのか、どこまで踏み込んでいいのかと思いました。 ピアサポーター活動をする上で、自分達が利用学生へのサポートをすることで、学べるが多かった。サポートの仕方、不自由な方への接し方。最初は、不安や壁があると思い込んでいたけど、後からはなかったと思えること。 （やってみる前と、やった後の印象は？）変わりますね。最初に一步を踏み出すのは難しかった。留学生の語学支援と同じで、距離や壁がありますけど、慣れたと思います。 色々な考えや自分を発見できるようになった。今かかわっている利用学生の場合だったら、後輩にサポートの壁やハードルについて伝えるとしたら、まず合わせて少し話をさせると伝わりやすと思う。

表3. ヒアリング調査の結果（サポーター学生・教員）(2)

対象	カテゴリ名	ヒアリングの具体的な発言内容（※一部抜粋・意味を損なわない程度に表記・文言を修正）
担当教員	募集・オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・年度始めのオリエンテーション時に、趣旨を説明し、全学年に対して募集した。 ・担当教員が受け持つ、大人数の講義の際に募集の案内をした。 ・学科会議で、ゼミ教員からゼミ生への周知の依頼をした。 ・サポーター学生の追加募集のために、個別に学生への声掛けをした。 ・サポーター学生から友人への声掛けを通してサポーター学生の人数が増えた。 ・各学年のオリエンテーションでの説明だけでは、他学年には浸透しない。 ・ピアサポーターは有償であることを説明した。 ・心構えとして、サポートをしてあげるという気持ちでなく、自分のためになるという気持ちで取り組んでほしいと強調して伝えた。 ・1年目のサポート開始時にはトレーニングは無くして済んだ。不要ではなく、色々ニーズはあると思うので、担当でご尽力が大切だと思う。
	サポートの内容	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な手伝いは、教室まで一緒に行く、教室へ一緒に入ることもある、次の学生に引き継ぐ、昼食の手伝い、排泄を1日1～2回するので、保護者や事業者を引き継ぐ、排泄前後の付き添い。 ・最初は学生と教員が食事のサポートを行った。 ・課外活動については、ピア・サポーターが自主的に無償でサポートしていた。 ・夏休みの集中講義の時もサポートは行った。 ・テスト期間は学科教員と事務職員が対応した。 ・学科のコースに分かれる（より専門的な内容になる）と、他コースの学生がノートテイクをするのが難しい場合があった。
	運営・実施体制	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポーターは2人1組の体制で行った。 ・担当は、利用学生とサポーター学生の関係及び、サポーター学生同士の関係性を考慮して調整した。 ・前期開始時は、履修登録が確定せず担当を組むのが難しかった。また、履修変更の際、調整が必要であった。 ・1年目は、ピアサポーターが決まるまでの期間、学科教員と事務職員が担当した。 ・留学生にも協力してもらった。 ・学生のピアサポートの頻度は、学生によって偏りはあった。1週間に3回以上の学生、1週間に1回の学生もいた。たくさんやることで、負担にならないようにと伝えた。学生に対して、「学習できる環境、受益者が納得できる手伝いをしてください。」と伝えている。 ・利用学生と同学年のサポーター学生が多かったため、学年が上がるにつれて就活などで多忙となり、特に後期はサポート活動が難しくなった。 ・サポーター学生の急用や時間制変更などによる急なサポーターの調整は、メールやポートフォリオにて呼びかけを行った。 ・調整、変更、周知などの連絡は、1年目は基本的に教員が行ったが、2年目以降はSNSを使って利用学生が行っていた。 ・引継ぎの場所は、ピア・サポーター同士でSNSで連絡していた。 ・仕事内容は、学科会議での協議の積み重ねであった。（早いスピードで） ・数名の学生から、「（給与を）貰うのは嫌だね。」という意見もありました。嬉しいことなのですが、有償にすることにより責任感をもってもらうことを説明しました。
	学生からの相談	<ul style="list-style-type: none"> ・1年目は利用学生・サポーター学生から対応に困ったことについての相談はなかった。
	今後の活動の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・手伝ってあげるといふ、上から目線は厳禁。学習・生活の手伝いをする。良い意味での対等意識。エージェンシーの尊重が大切。「手伝ってあげてください。」の言葉は、避けるべきである。全学的な組織。エージェンシーの尊重を気にしない人もいると思いますが、大切なこと。 ・ノートテイクについて、ピアサポーターに指導をしたことはない。同じ学年、上の学年、院生によるノートテイクについては、理解できていると思うので、利用学生も安心できると思う。 ・下級生が上級生のピア・サポートにつく場合、学則・規則上問題がないか（2回以上聞くことでの他の学生との公平性など）について検討する必要がある。 ・下級生が上級生にピア・サポートにつく場合や、他学科の学生がつく場合、授業内容を理解してノートテイクできるかについて検討する必要がある。 ・ピア・サポーターの負担軽減のために、ICレコーダーを使用するなどの対策をすることで、サポーター学生の募集につながるのではないかな。 ・利用学生が望んでいる学修レベルに合わせたサポーター学生の配置を考える必要がある。 ・サポーター学生として、信頼できる学生が登録されることが望まれる。 ・利用額氏柄の障害特性に合わせたサポートが必要である。 ・ピア・サポートは、障害のある人だけでなく、色々なサポートができる。色々なかたちの学習支援ができ、範囲は広い。障害は、どういう種類の人を支援するのか。学習障害、発達障害のサポートは、どうするのか、大切だと思う。 ・今後のピア・サポートの範囲として、障害者手帳の有無にかかわらずサポートが必要である。

2. 現在のピア・サポート活動の状況

1) ピア・サポートの実施体制

3つのピア・サポート活動の実施体制を表4に示す。なお、実施体制を整理するにあたり、サポート学生の配置（シフト）や利用学生とサポート学生のマッチングを決めるなど、ピア・サポート全体のマネジメントに関するものを便宜上「管理」と表記した。

① 教育基盤センターにおけるピア・サポート活動

教育基盤センターにおけるピア・サポート活動は、基本的には初年次もしくは低学年の学生から留学生、留年学生（過年度生）など、幅広い対象を利用学生として想定している。サポーター学生は、学科から推薦された学生3～5名ずつ、及び国際交流・留学生支援センターから

推薦を受けた留学生 2 名の計 19 名である。サポーター学生は、それぞれの授業の空きコマでシフトを調整し、ラーニングコモンズに各時間 3 名ずつ待機する。利用学生は、学修や大学生活についての悩みなど、先輩に相談したいことがあった際に、ラーニングコモンズを訪れ、待機しているサポーター学生に随時相談をすることができる。サポーターのシフトについては、教育基盤センター学修支援部門の兼任教員（各学科 1 名選出）が把握し、必要に応じて双方の学生から相談を受ける。

② CH サポートセンターにおけるピア・サポート活動

現在 CH サポートセンターで行っているピア・サポート活動は、本学国際観光学科が行ってきたピア・サポート活動がベースとなっている。ピア・サポートの利用学生は、基本的に配慮学生を想定している。この配慮は、学生本人または保護者からの修学上の配慮の申請⁵⁾に基づき、ピア・サポートを提供することが「合理的」であると認められた場合に利用開始となる。サポーター学生は、学科を問わず全学ポートフォリオでの募集や各学科の教員からの呼びかけに対して関心を持った学生である。合理的配慮の提供内容としてピア・サポートが必要と認められた

場合に、利用学生の時間割にあわせて必要なピア・サポートの内容を検討し、各時間のサポーター学生が決定する。サポーターのシフトについては、CH サポートセンター学生サポート室のピア・サポート担当教員（各学科 1 名選出）が把握し、必要に応じて双方の学生からの相談を受ける。

③ 社会福祉学科 SA 制度におけるピア・サポート活動

社会福祉学科における SA 制度は、2014 年度に学科内学生支援委員会⁶⁾における取り組みから始まった。SA 制度とは、同学科内の上級生が下級生に勉強を教える取り組みである。利用学生は、基本的には配慮学生および留学生を想定しているが、大学適応を目的として初年次学生に導入される場合もある。利用学生とサポーター学生の双方は、ゼミ教員からの推薦を受けて登録し、学科内学生支援委員会において協議の上で、利用学生とサポーター学生のマッチング（SA 実施の日程・組み合わせ決め）を行い、決まった時間に同一の組み合わせで実施する。実施の頻度は、利用学生の希望及び担当教員の判断によるが、おおむね週 1～2 コマである。SA 制度の運用にあたっては、学科内学生支援委員会の教員と、利用学生およびサポーター学

表 4. 長崎国際大学におけるピア・サポート活動の実施体制

	教育基盤センター ラーニングコモンズ	CH サポートセンター ピア・サポート	社会福祉学科 SA 制度
管理運営 (担当教職員)	学修支援部門兼任教員	学生サポート室 ピア・サポート担当教員	学科内学生支援委員会担当教員 ゼミ担当教員
サポート学生の 配置	月～金の 1 限～5 限（昼休み含む） ラーニングコモンズに 3 名ずつ配置	利用学生の希望・時間割に 合わせて配置	利用学生の希望に合わせて配置 (基本的に週 1～2 コマ)
ピア・サポート の実施体制			

生のゼミ担当教員が随時報告・相談を受ける。

2) 提供しているピア・サポートの内容

3つのピア・サポート活動で提供されているピア・サポートの内容を表5に示す。

① 教育基盤センターにおけるピア・サポート活動

教育基盤センターにおいて提供しているピア・サポート活動の主な内容としては、学修支援と修学上の相談である。決まった時間や組み合わせではなく、利用学生が利用したい時間にラーニングコモンズを訪れ、その時間のシフトに入っているサポーター学生に自由に相談することができる。サポーター学生には留学生も含まれ、留学生の大学適応に関する相談や情報交換が行われる場合もある。また、ラーニングコモンズが常に開かれた場となっていることで、学生の自主的な学修の場、グループ学習の場としての機能に加え、空き時間を過ごすための居場所としての機能も果たしている。

② CH サポートセンターにおけるピア・サポート活動

CH サポートセンターにて提供しているピア・サポート活動の主な内容としては、講義前の準備

（専用の昇降機や資料の準備など）、授業中のサポート（利用学生が使う机・機材の設置、ノートテイク、ページめくり、板書等の撮影、課題等の代筆）、学内での移動支援、食事等の生活場面でのサポート等である。基本的に、利用学生の時間割に沿って行われるが、フィールドワークなどの授業に関連する課外活動時にも、サポーター学生が対応する場合もある。利用学生は、配慮学生を対象としているため、その提供内容は、利用学生の障害の程度や決定した合理的配慮の内容によっても異なる。

③ 社会福祉学科 SA 制度におけるピア・サポート活動

SA 制度において提供しているピア・サポート活動の主な内容としては、利用学生への学科専門科目の学修支援である。また、ゼミ教員が利用学生、サポーター学生の特性等を踏まえ、同学科内の先輩後輩でマッチングすることにより、同学科の先輩後輩との人間関係を築くことができるなど、大学適応のサポートの役割も果たしている。

3) ピア・サポートの実施状況

①については、教育基盤センターラーニングコモンズの利用状況を、②については、CH サポート

表5. 長崎国際大学におけるピア・サポートの提供内容

サポート提供内容	教育基盤センター ラーニングコモンズ	CH サポートセンター ピア・サポート	社会福祉学科 SA 制度
講義前の準備 (専用の昇降機・資料準備など)		○	
講義中のサポート (ノートテイク・カメラ撮影など)		○	
講義前後の 学内の移動支援		○	
食事等 生活場面のサポート		○	
講義時間外の 学修支援	○		○
修学上の相談 アドバイス	○		○
居場所機能 (自学・グループ学習・交流の場として)	○		

トセンターのピア・サポートにサポーターとして登録している学生数、実働数を、③については、社会福祉学科 SA 制度の運用実績等のデータを用いる。

① 教育基盤センターにおけるピア・サポート活動

2017年度に開設したラーニングcommonsの2017年度前期の利用状況を図1に、試験期間中の利用状況を図2に示す。

夏季休暇中を除くと、1日当たりの利用学生数はおよそ20名であった。前期試験1ヶ月前の開館時間延長（6/26～8/8のみ21時まで開館）により、利用者が約1.5倍に増加し、試験期間前の利用が多かった（図2）。なお、利用状況は、個人での自主学習に加え、学生のグループ学習や、ゼミ等の少人数授業での利用など多岐にわたった。サポーター学生への個別の相談の内容としては、実数としては少なかったものの、短

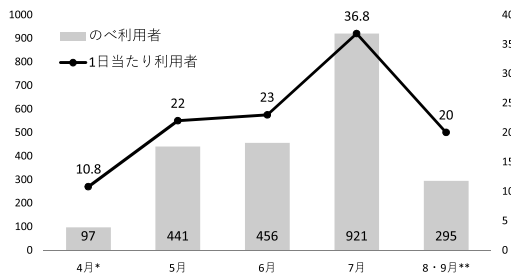


図1. ラーニングcommons利用状況（2017年度前期）

* 4/19からの開室
** 夏休み期間を除いた数値

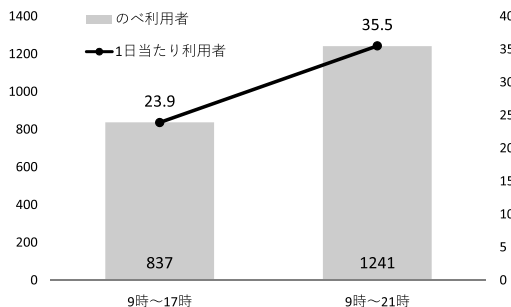


図2. 開館時間延長による利用者数の変化（6/26～8/8）

期（交換）留学生が、サポーター学生に大学生活全般について相談したり、情報交換をしたりする様子が見られた⁷⁾。

学生の利用状況をみると、試験期間前に利用が増えており、学生が自身の学習の場として、また友人との学習・交流の場として利用していることがわかった。また、短期（交換）留学生がサポーター学生に相談し、人間関係を広げる様子も見られ、仲間づくりや居場所としての機能を果たしていることがわかった。

② CH サポートセンターにおけるピア・サポート活動

2017年度に開始した、CH サポートセンターに登録しているサポーター学生数を図3に、サポーター学生の実働時間を図4に示す。

サポーター学生は月を追うごとに増加しており、12月現在では約1.8倍となるなどピア・サポート活動が広がりを見せていることがわかる。また、実働時間を見ると、前期・後期共に授業のあっている期間での利用がほとんどであり、CH サポートセンターにおけるピア・サポート活動

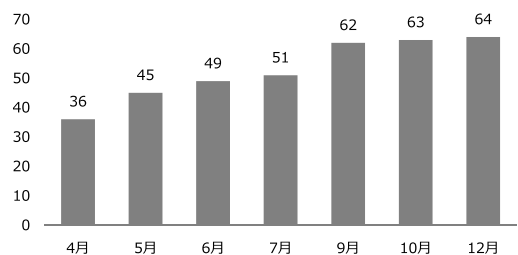


図3. ピア・サポーター登録学生数

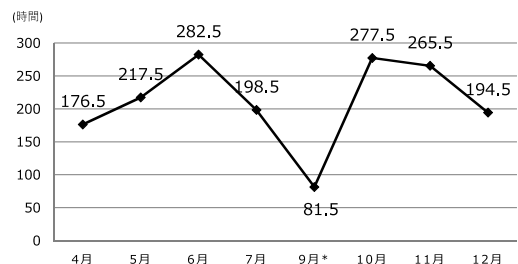


図4. ピア・サポーター学生配置時間数実績

*後期授業開始は9/21

は授業時間や授業の前後で提供されていることがわかった。

③ 社会福祉学科 SA 制度におけるピア・サポート活動

社会福祉学科 SA 制度のサポーター学生数、利用学生数、実施数を図 5 に、各年度に実施された主な科目を表 6 に示す。

サポーター学生、利用学生数、実施数共に、開始年度である 2014 年度をピークに 2015 年度、2016 年度とほぼ横ばいの状況である。国家試験受験必須科目の指導を想定して始めたものであるが、現在では対象を全学共通科目等にも拡大し、学修習慣化（毎日のレポート、期末試験対

策）など多様なニーズに対応していることがわかった。

Ⅲ. 総合考察

本研究の目的は、本学におけるピア・サポート活動の現状を整理し、今後の課題と対応策を示すことであった。本学におけるピア・サポート活動は、名称や対象、実施体制が異なっており、提供されているサポート内容についても様々であることが分かった。また、サポーター学生は、活動開始時には専門的な知識はほとんど持たないままに活動を開始していた。山田（2010）は、ピア・サポートの開始に際しては、サポーターへの研修・トレーニングと、活動を包括的に支援するための教職員体制を構築することが重要であると述べている。本学においては、配慮学生の増加等に伴い、対応せざるを得なくなった教職員と、それに半ば引っ張られる形でスタッフとして登録し、ピア・サポート活動を開始した学生達によって、十分な研修や検討がなされないまま、また、ピア・サポート活動の組織や体制が整っていないままに活動をスタートせざる得なかった現状があった。しかし、利用学生とサポーター学生が友人関係・先輩後輩関係の延長線上として、試行錯誤しながら活動を共にしていく中で、双方の学生がサポート内容や運営体制づくりに主体的に参画し、結果的に学生

表 6. SA 制度における各年度の主な利用科目*

2014年度	社会福祉士国家試験科目 語学（日本語・英語・韓国語） コンピューター、試験対策
2015年度	社会福祉士国家試験科目 介護福祉士関連科目 語学（日本語・英語・韓国語） 試験対策
2016年度	社会福祉士国家試験科目 語学（日本語・英語・韓国語・中国語） レポート作成支援、試験対策
2017年度	社会福祉士国家試験科目 語学（日本語・英語・韓国語・中国語） 全学共通科目 レポート作成支援、試験対策

*SA 利用実績より作成

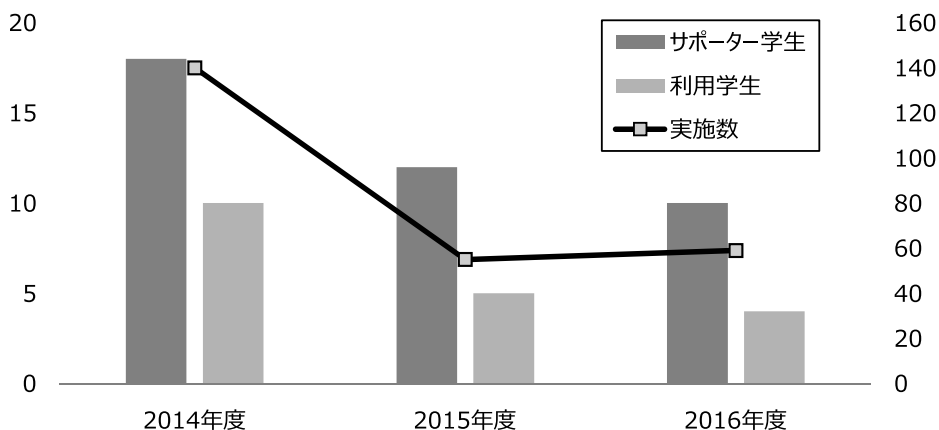


図 5. SA 制度利用状況（2014年度～2016年度）

の自主性・主体性が促され、学生たちの成長機会の提供につながったものと考えらる。一方、その陰には、活動を支えた教職員の姿があり、利用学生とサポーター学生の特性を把握した上でのマッチング時の配慮や、運営上困ったことが起きた際に、双方の学生の相談にのるなどして、活動の円滑な運営を担当教員がサポートしていた。特に、配慮学生へのピア・サポートを提供する場合には、サポーター学生にもある程度の専門性が求められることが予想されることから、今後も学生の主体性を尊重しながらも、教職員が運営に関与する体制を持つておくことは重要であろう。

また、小貫（2011）は、大学におけるピア・サポートについて、学生に対する効果だけではなく、大学教育全体に対するメリット、各機関の文化や現状を踏まえて、その位置づけを再考していく必要性について述べている。本学における配慮学生数は増加傾向（2017年4月時点で2.8%、2016年度全国平均は0.86%⁸⁾）にあり、サポーター学生への需要が高まっていることに加え、学生の障害の多様化に伴い、必要とされるサポートの範囲も広がりを見せている。また、ラーニングコモンズの利用者数の増加にもみられるように、学修支援を必要とする学生数も増加の一途をたどっている。サポーター学生が、「友人に声かけ」をすることで徐々に活動の基盤が広がってきたように、今後、全学的にピア・サポートがうまく機能していくことで、「“思いやりある” 関係性の構築や集団づくり（トレパー・コール、1999；パーンズ亀山ら訳、2002）」が促され、ピア・サポートに直接的にかかわる学生のみならず、大学全体の風土にも影響を及ぼすのではないだろうか。そのためには、学部・学科をこえたピア・サポート活動が必要である。

以上を踏まえ、図6に示すような全学的なピア・サポート活動の運営体制のモデルを提案したい。

現在、本学には学部・学科を超えた全学的な

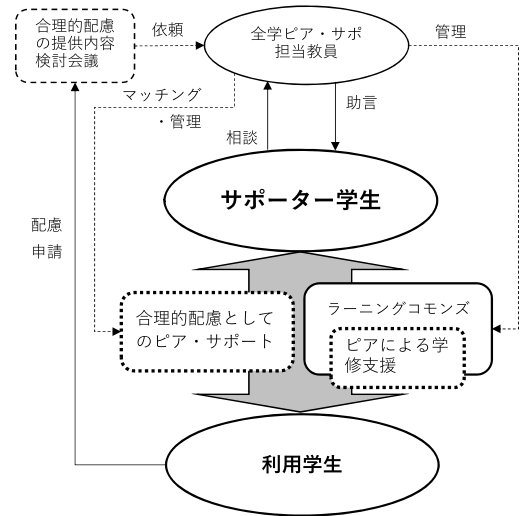


図6. 今後のピア・サポート活動の展開モデル

組織が2つ存在する。双方の役割には重なる部分もあるが、例えば、利用学生が配慮学生である場合には、サポーター学生に専門的知識が必要な場合もあり、サポーター学生の配置に配慮が必要である一方で、ラーニングコモンズのように拓かれた場があることで、利用学生が時間や組み合わせにとらわれずにピア・サポートを気軽に利用ができ、必要な学修支援や交流の場をもてるといった、双方の利点を活かした体制が必要である。そこで、2つの全学的な組織を組み合わせる形でピア・サポートを提供することで、利用学生にとっては、求めるサポートの内容によって窓口を選び、必要なピア・サポートを受けられると同時に、サポーター学生を1か所から派遣することで、各サポーター学生の所属学科の専門性や得意な分野を活かしたサポート（例えば、国際関係系学科や外国語学系学科の学生が英語を教え、福祉系学科の学生が移動介助を他学生にも教えるなど）を提供することができると考えられる。現在は複数のセンターや各学部学科で、それぞれの活動の管理運営に、それぞれ別の教職員が携わっている。管理運営を全学的な組織として一本化することで、各教職員が重複して担っていた役割を整理することが

でき、結果的に全学的な教職員の負担を減らすことにもつながるのではないだろうか。

今後のピア・サポート体制の整備に向けて、具体的には、まず利用学生・サポーター学生の双方が、各制度・学科を超えて、活動の知識・経験を交流させることが必要である。現在のピア・サポート活動においては、活動を通して利用学生とサポーター学生間で先輩・後輩関係や友人関係が形成され、ピア・サポート活動中または活動外においても交流がみられるが、制度・学科内でのやりとりに限られている。また、サポーター学生の中には複数のピア・サポート制度に登録し、活動をしている学生が一部いるものの、各ピア・サポート活動に関わっているサポーター学生間の交流の機会がなく、サポーター学生はそれぞれが思うピア・サポートを提供するにとどまっている。今後全学的な利用学生・サポーター学生の交流を促進することで、学生間に様々なピア・サポート活動のノウハウが還元し、学生たちがさらに自主的に成長していくことが期待される。そのためにも、今後は、共通の研修プログラムの実施などで、ピア・サポートに関わる学生を全学的に育成することが必要であろう。学生間にピア・サポートに関する共通の知識や基盤を涵養することで、学生間の交流がより有意義なものになり、モデル図のような学生間の主体的なやりとりが中心となったピア・サポート活動が展開し、大学全体の風土づくりにもつながっていくことが想定される。

IV. 今後の課題

本研究において扱ったヒアリング調査は、配慮学生を対象としたピア・サポートに関する内容が主であった。大学生においては、アイデンティティの確立や同年代との親密性が発達課題となり（E. H. エリクソンら、2001）、植木田（2008）が指摘しているように、「社会へと足を踏み入れる準備段階として、高等教育機関等でじっくりと他者との関係や自己を見つめ直し、新たなアイデンティティを模索しつつ、自分の

可能性と向き合う時間が保証されることは、この時期の青年では誰にとっても重要」である。つまり、本学すべての学生にとって、ピア・サポート活動が成長の機会となり得ることを考えると、誰もが利用できる場としてのラーニングコモンズでのピア・サポート活動について、さらなる検討が望まれる。その上で、双方の経験値を共有するための仕組みを構築していくことが今後の課題といえる。

付 記

本研究において取り上げた、本学におけるピア・サポート活動は、活動に関わってきた学生・教職員が、学生個々人のまた各学部学科や本学全体の状況を鑑みながら作り上げてきたものである。関係者の皆様のご努力に敬意を表するとともに、深く感謝の意を表す。

なお、近年、「障害」という言葉の表記に関しては、「障害」、「障がい」、「障碍」等の使用について議論されており、本学においては法律用語などの固有名詞以外では「障がい」という表記をすることとなっているが、本稿では国の検討の動向を踏まえ（「障害」の表記に関する作業チーム、2010）、「障害」という漢字表記を使用した。

本研究で用いたヒアリング調査は、長崎国際大学平成27年度学長裁量経費「大学における学生支援のための体制構築及び支援プログラム」（柳智盛・仮屋蘭博子・岡本美紀・柴田哲雄・長岡寛明・小島大輔・内田裕子）による研究成果の一部である。

注

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が実施した、「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）」「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査（平成22年度）」より一部抜粋。
- 2) この点については、明確な記録として残っているデータはなく、2003年度に入学した身体障害を持つ車いすの学生を知る教員からの伝聞によるものである。
- 3) ラーニングコモンズとは、従来型の静かに行う学習から、活発にグループで討議するようなアクティブ・ラーニングまで、現代の大学生の多様な学習を支援するための施設・設備のことである（米澤、2013）。本学においては、2017年度より、

図書館を含む学内3か所に整備された。本研究では、ピア・サポートの観点から検討を行うため、サポーター学生を配置している食堂上に設置されたラーニングコモンズにおける活動を主に取り上げる。

- 4) 長崎国際大学では、ディプロマ・ポリシー（本学の学位授与の方針）として、「人間尊重」を基本理念に、「ホスピタリティの獲得」をその具体像としている（本学ホームページ／大学総合／目的と3つのポリシーの頁（<https://www1.niu.ac.jp/about/policy/>）参照）。
- 5) 本学では、2016年4月に施行された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」に伴い、「九州文化学園長崎国際大学における障がい者を理由とする差別の解消の推進に関する教職員対応要領」（本学 HP にて公開）を制定した。本学の全ての学生は、必要に応じて大学に対し修学上の配慮の申請を行うことができる。学生から修学上の配慮の申請が行われた場合、個別面談で聴き取りを行った上で、合理的配慮の提供内容検討会議が開かれ、申請内容に基づいて大学が提供する合理的配慮の内容が決定される。詳細は、本学ホームページ／学生生活／学生相談・カウンセリングの頁（<http://www1.niu.ac.jp/life/counseling/>）及び、柳ら（2017）参照。
- 6) 本学社会福祉学科では、学科内において支援や配慮が必要な学生への対応について、学科内教員で検討するための組織として学生支援委員会をおいている。学生支援委員会では、配慮学生のみならず、留学生や経済的支援が必要な学生、転学科生等への対応を検討するほか、教員が学生対応に迷った場合に、委員会メンバー（学科内教員、委員長は心理学の専門家）と必要に応じ学科長等と随時カンファレンス等を開き、学生対応する教員をサポートする仕組みを作っている。本研究で取り上げる SA 制度は、学生支援委員会で行っている取り組みの1つである。
- 7) 平成29年度 第6回教育基盤センター運営委員会資料より一部抜粋。
- 8) 本学データは、2017年4月26日に行われた「2017年度修学上の配慮が必要な学生に関する説明会」にて「2017年度配慮が必要な学生の理由科目及び配慮願い事項」が配布された学生数と、2017年度4月時点の本学学生数から算出したもの。全国平均は、日本学生支援機構（2017）の調査結果「平成28年度（2016年度）大学、短期大学及び高等専

門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査報告書」より抜粋。

引用・参考文献

- 植木田潤（2009）「思春期・青年期における心理発達諸相と発達障害の検討，高等教育機関における発達障害のある学生の支援に関する研究—評価法の開発と教職員への啓発—」国立特別支援教育総合研究所報告書（H19・20年度），pp.39-42.
- 内野悌司（2003）「広島大学ピア・サポート・ルームの初年度の活動に関する考察」学生相談研究，23，pp.233-242.
- E. H. エリクソン・J. M. エリクソン（著），村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）（2001）『ライフサイクル，その完結〈増補版〉』，みすず書房.
- 小貫有紀子（2011）「ピア・サポートの現状と課題—ピア・サポートの拡大と多様化—」『学生支援の現代的展開—平成22年度学生支援取組状況調査より—』，独立行政法人日本学生支援機構学生生活部大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム報告書，pp.63-77.
- 「障害」の表記に関する作業チーム（2010），『「障害」の表記に関する検討結果について』，内閣府障害者施策ホームページ 障がい者制度改革推進会議第26回（H22.11.22）資料2，http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kaikaku/s_kaigi/k_26/pdf/s2.pdf（2018年2月25日取得）
- トレバー・コール（著）（1999），バーンズ亀山静子・矢部文（訳）森川澄男（解説）（2002）『ピア・サポート実践マニュアル』，川島書店.
- 西村多久磨（2014）「ピア・サポート」下山晴彦編『誠信 心理学辞典（新版）』，誠信書房，pp.240
- 日本学生支援機構（2017）『大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査（平成27年度）』
- 日本学生支援機構（2017）『平成28年度（2016年度）大学，短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査報告書』
- 橋本優花里（2012）「仲間の中で育つ納得感」山地弘紀・橋本建夫編『学生の納得感を高める大学授業』，ナカニシヤ出版，pp.131-148.
- 柳智盛（2017）「長崎国際大学における障害学生支援の取り組みについて—合理的配慮と障害学生支援に関するFD・SD—」，長崎国際大学論叢，17，pp.75-90.
- 柳智盛編（2017）橋本建夫監修『学生サポートブック—教員ができるサポート—入学前・入学期編

一』, 学校法人九州文化学園長崎国際大学・長崎短期大学.

山田剛史 (2010) 「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」大学と学生, 87, pp.6

-15.

米澤誠 (2013) 「学びを誘発するラーニング・コミュニティ」カレントアウェアネス, 317, pp.22-26.